

じゅりみち

…被災地支援情報…

第61号 発行日 2000.1.13
被災地NGO協働センター

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町7-2-6

TEL 078-685-0068 / FAX 078-685-0071

Internet <http://www.pure.co.jp/ngo/>

E-mail: ngo@pure.co.jp

口座番号: 01180-6-68566 (郵便振替)

西暦2000年の年明けを迎え、この17日で、KOBEの被災地も阪神・淡路大震災から5周年を迎えます。
5ヶ月近くお休みしてしまった「じゅりみち」ですが、お久しぶりにKOBEからの話題をお届けします。

(3) 14版

2000年(平成12年)1月4日

NGO界の第一人者 草地賢一さん逝去

1995年阪神・淡路大震災発生2日後の1月19日、阪神大震災地元NGO救援連絡会議を立ち上げた草地賢一さんが、1月2日午後4時3分神戸中央市民病院にて、急性腸炎による肺血症で亡くなられました。余りにも突然の死であり、関係者の私たちもただ呆然としております。58歳の死と言うのは余りにも早いとしか言いようがないのですが、特に震災後のお働きを思い起こすと、『本当に、ごくろうさま。』と申し上げたい。心からご冥福をお祈りします。

さて、この5年間で私たちは、随分多くのことを教えられました。中でも草地さんが繰り返し言っていたのは、『ボランティアは、チャリティー(慈善)ではなくジャスティス(正義)のために働くもの』という言葉です。

もう一つ、5年目が終わろうとする直前に強調していたのは、『復興民主主義』です。まだ、被災地は完全復興を成し遂げていません。私たちは、「最後のひとりが復興するまで、見とどける。」とあらゆる場で宣言してきました。きっと、この長い過程で『復興民主主義』を形成することが、草地さんの遺志を継承することになることと確信します。

阪神大震災地元NGO救援連絡会議の分科会の一つとして結成され、その後独立し、改称されて現「被災地NGO協働センター」の存在があります。そう言う意味でも、私たちが草地さんの遺志の一つでも継承していくことが、残されたものの使命かと思います。

(被災地NGO協働センター 代表 村井 雅清)

私たちは大きなことはできません。

ただ小さな愛をもってやることはできます。(マザー・テレサの言葉より)

草地賢一さんはどうか神
出没のところがあつたが、
その近いところも人に喰い
食しませるいとも与えないと
恵だしいものだった。草地
さんらしいといえば草地さん
うしいが、震災から五年の節
日を目前にしてかけがえのな
いリーダーを失った喪失感
は、深く、重い。
草地さんは阪神大震災地元
NGO救援連絡会議を立ち上
げたのは、震災間もない一九
九年一月。全国から馳は
せ参じたボランティア団体の
連絡調整役となり、以後、同

草地賢一さんを悼む

会議から発展した「NGO外
国人救援ネット」「阪神・淡
路大震災〔仮設〕支援NGO
連絡会」「現・被災地NGO
協働センター」が被災地支援
の中核を担つていて。
それらの活動は、五年前の
ロシア・サハリン地震、九六年
の震南大地震、八八年のパ
ナニコニギニア津波被災、
昨年のトルコ・台湾大地震の
救援へと受け継がれ、いま神
戸は国際的な災害支援の拠点
となりつつある。

ボランティアは行政の補完
役ではなく、対等のパートナ
ーとして活動を始めた。草地
さんはこのたぐいまれなバ
イタリティを変えていたの
は、「愛」と「正義」と「民
主」だったと思う。草地さん
の地で誕生したPJD
ジアの「グラス・ルーツ(草
原)」は、地域へ分け入り、民衆と共に
行動した。権力者の横

河口上のスマラマで夜の宿を
借りた折、耳元で群舞する蚊
(が)に悩まされまんじりと
もできなかつた筆者(慶山)
に対し、草地さんはまったく
憲に介さず朝まで熟睡。生存
力は並外れていた。昨年暮れ
まで続いた海外出張などの激
務、そこに体力への過信がな
かったかどうか悔やまる。

(慶山充夫編集委員、社会
部・磯辺康子)

草の根
二さわり続
け

パブリックセミナーの干ばつ被害について、現地報告す
る草地賢一さん(1998年3月、神戸市中央区)

南北格差に憤怒をたぎらせ
た。暴雨や奪取に怒り、そこでの
人の生き方と日本の社会のあ
りようを問いかねることに通じ
ていた。被災地での精効的な
活動も、私たちの社会に向け
た内なるメッセージを取れ
る。



■2000年1月4日 神戸新聞朝刊

…被災地支援情報…

《仮設は今...》

被災地編

被災地における今後の課題

仮設解消に伴って、「終の住みか」となる復興住宅や民間の住宅では被災者の「人間関係づくり」への摸索が続いている。仮の住まいで形成されたコミュニティが崩壊し、また最初から人間関係を作り直さねばならない。たとえ自治会を作ろうとしても、高齢者ばかりの住宅では機能し得ない。復興住宅の高齢化率は高齢化社会を反映して3倍から4倍といわれている。若い世代は仕事が忙しく時間がないと理由から自治会づくり、コミュニティづくりにはとうてい参加ができない。しかし、ここでこういった社会構造にも問題があることに気づかされる。

被災者が郊外の仮設に移つて、地元の住み慣れた街に戻りたいということは果たしてわががまなのだろうか。長年暮らしてきた町で友だちや知人を作り、その土地にあつた商売をしてきた人が、全く環境の違つたところで商売やコミュニティづくりをするのはかなり厳しい事である。同じ土地で自力再建した人でも、人

が戻つて来ないので、お店がつぶれ二重三重のローンを抱えていたりする。環境が変わるのはその人の生きがいまでも奪うことになるのである。

コミュニティづくりとしてボランティアも積極的にお茶会やイベントを各地で開催しているが、今後も少し踏み込んだ自立に向けた支援を考えて行かなければならないだろう。

被災者を支えることから、被災者自身が他人を支えられるほど一人で立つて歩いていくようにしていく支援が必要だ。一方的に支えて終わるのではなく、そういう支援が今後の課題と考える。まず、コミュニティの再形成を行い、生きがい、仕事づくりへといつたソフト面の支援がこれからは急務だろう。復興住宅でもすでに38人の孤独死・自殺が出ている(1月9日付朝日新聞)。眞の「支え合いの社会」の構築は今始まつばかりである。

(被災地NGO協働センター 増島智子)

東京

1999年(平成11年)12月21日

火曜日

14版 (24)

次は「くらしの復興」

神戸市内の仮設住宅解消

神戸市内の仮設住宅の最後の居住者が引っ越し
終えた(神戸市長田区 西代仮設住宅)



すでに三分の一強の住宅たた。男性は、震災で犠牲になった妻の仮壇をフロン車の西代仮設住宅。寒風が吹きさす中、最後の住民となった男性(51)は市職員などをつとめの家財道具を車に積み込み、その車でかさを市職員に返し、他の居住者の引っ越しを手伝っていた。(残されたお年寄りが元気にしていて安心)

男性は、震災で犠牲になった妻の仮壇をフロン車の西代仮設住宅へ向かった。神戸市内の仮設住宅で三十日、最後の居住者が引っ越しを終えた。

地域づくりなど課題山積

すでに三日、復興住宅でも見守り続けたい」と話した。男性は六日前に同仮設の六世帯と一緒に移転先の復興住宅のかぎ受け取った。その後、他の居住者の引っ越しを手伝っていた。(残されたお年寄りが元気にしていて安心)

した。復興住宅でも見守り続けたい」と話した。ただ、「仮設でなあんな多くの人が亡くなつたのが、行政はもう一度原点に返つて考えてほしい。引っ越しを假設で始めたところになった。一日も早く復興したい」と語る。

四月に市長田区の仮設に多くの人が亡くなつたのが、行政はもう一度原点に返つて考えてほしい。引っ越しを假設で始めたところになった。一日も早く復興したい」と語る。

1999年12月21日

神戸新聞朝刊

継続の姿勢強調

神戸市長会見

神戸市の仮設住宅解消を受け、市役所では畠山幸俊・東良と金井外城雄生活再建部長が二十日午後四時半から記者会見。同市長は「恒久住宅でも暮らしきる時間がなく、(復興住宅でのコミュニティづくりなど)これまでが済んだのでこれからの方が時間がかかる」と指摘、「一仮設解消」と云ふ言葉を用いて、「ボランティアや被災者代表と一緒に問題解決に当たり、被災した訓練や教訓についての顔が見える関係を築けたが大きかった」と振り返った。

同市長はまた、避難所から仮設住宅、災害復興住宅の提供「一仮設解消」という「單線型・現物支給」を基本とする国は「仮設を乗り越える取り組みも進んだ」。

限界があるとして、今回の震災を教訓に議論を通してほしい」と注文。被災地では、自力仮設延長への補助などを国に求めたが実現せず、一方で被災者生活再建支援法の成立、復興基金を活用した民間賃住宅の家賃補助など、国

の仕組みを乗り越える取り組みも進んだ。同市長は当初から被災者支援の選択の幅が広ければ、もっと早く被災者の自立が可能になつたのではないか」と訴えた。

震災五年を前に最大の被災地・神戸の仮設入居者がいなくなつたことを受け、食員した畠山幸俊・神戸市長は「仮設は解消したが、暮らしの復興はこれから」と厳しい表情で語った。復興住宅に入居したに遊び込み、復興住宅へ向かった。神戸市内の仮設住宅で三十日、最後の居住者が引っ越しを終えた。

震災五年を前に最大の被災地・神戸の仮設入居者がいなくなつたことを受け、食員した畠山幸俊・神戸市長は「仮設は解消したが、暮らしの復興はこれから」と厳しい表情で語った。復興住宅に入居したに遊び込み、復興住宅へ向かった。神戸市内の仮設住宅で三十日、最後の居住者が引っ越しを終えた。

震災五年を前に最大の被災地・神戸の仮設入居者がいなくなつたことを受け、食員した畠山幸俊・神戸市長は「仮設は解消したが、暮らしの復興はこれから」と厳しい表情で語った。復興住宅に入居したに遊び込み、復興住宅へ向かった。神戸市内の仮設住宅で三十日、最後の居住者が引っ越しを終えた。

....被災地支援情報....

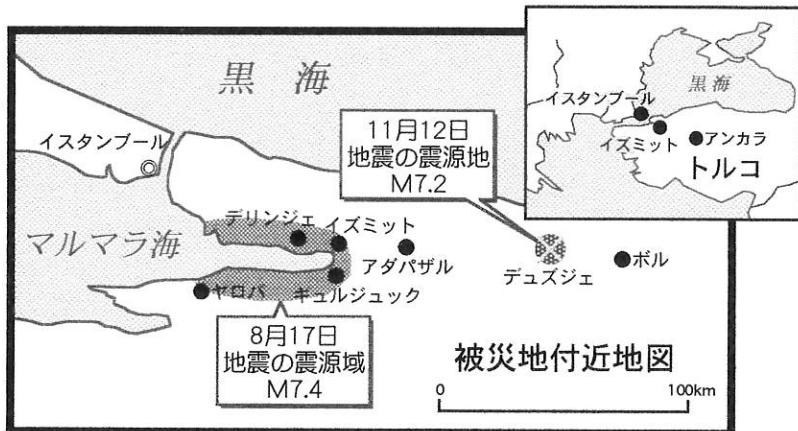
KOBEから被災地へ 緊急救援活動 まとめて大報告

「じゅりみち」の発行をしばらくお休みしている間に、8月・11月の二度に渡るトルコ大地震、9月の台湾地震、12月末のベネズエラ水害とたてつづけに大きな災害が世界各国で発生しました。KOBEのNGOやボランティア団体を中心として緊急救援実行委員会を結成し、NGO協働センターを事務局に救援活動を続けています。これまでの経緯と経過をまとめてご報告いたします。

(報告:被災地NGO協働センター 鈴木隆太)

トルコ 大地震

1999年8月17日・11月12日



8月17日、トルコ北西部を震源とするM7.8の地震が発生しました。その後、11月12日にまたも北西部ボル県を震源とするM7.2の地震が発生し、併せて13,000人以上の犠牲者を出しました。8月18日に被災地NGO協働センターを事務局として「トルコ北西部・緊急救援委員会」（委員長：村井雅清）を立ち上げ、先遣隊の派遣を皮切りに、12月末まで計4回の救援隊を派遣しました。

<第1次先遣隊>

- 8/25～9/5、被災地NGO協働センタースタッフの鈴木はじめ、3名の先遣隊を派遣
- アダパザル・イズミット・ギョルジュック等の被災地視察
- 当委員会のカウンターパートとなる現地NGO団体複数との接触を行う
- 震災後から援助が遅れていたコジヤエリ県デリンジェ市のテント村を発見、2日間にわたる調査を行う

<第3次派遣団>

- 10/22～29、村井委員長はじめ8名を派遣
- 「女性の村プロジェクト」の進捗状況の確認
- 「市民文化教育センター」建設のために、基本的な理念を合意し、デリンジェ市長と村井委員長との二者で調印
- デリンジェ市で活動する市民団体DEKMAKに常任委員会を設け、テント村での冬対策支援としてストーブをはじめ、生活雑貨の提供を約束し、常任委員で配布等の協議を任せる
- 子どものためのテント「愛と望みのテント」（運営・管理、イベントの企画などはすべて子どもが行っている!!）を見守っていくことを約束。
- イスタンブル市主催の「インターナショナル・カンファレンス」に故草地賢一氏が発題者として出席

<第2次派遣団>

- 9/25～10/4、村井委員長はじめ23名を派遣。また、NGO版二国間協力の試みとして、メキシコNGOのリーダー・クワテモック氏を同行。
- 先遣隊が接触した団体の一つ「CCC (Civil Coordination Center)」との協議
- 「CCC」の加盟団体である女性連合体が提案する「女性の村プロジェクト」を支援することを決定
- 10/23～25まで開催される「インターナショナル・カンファレンス」に参加することを約束
- コジヤエリ県デュズジェ市のテント村支援を決定
- デリンジェ市に建設予定の仮設団地の支援、「市民文化教育センター」の建設支援、テント村の冬対策支援等の検討のための情報収集と調査を行う

<第4次派遣団>

- 11/27～12/10、村井委員長はじめ7名を派遣
- 先発隊として27日から新たな被災地デュズジェに2名が入り、情報収集を行う
- デュズジェ市内のアタチュルク中央公園にできた第5テント村を支援
- 第2次派遣団の時から通訳をしてくれていたメンバーが「NGO KOBE・イスタンブル」という名でチームを編成、DEKMAK・派遣団とともにデュズジェ支援にあたる

<裏面へ続く>

被災地支援情報

<前ページより>

- ・デリンジエ、デュズジエの冬対策について協議
- ・デリンジエの市民文化教育センターの進捗状況の確認
- ・「愛と望みのテント」の子ども達主催によるイベントに招待される



今現在、NGO KOBE・イスタンブル（9名）のメンバーとメールのやりとりをしながら、現地のその後の進捗状況の情報交換を行っています。現地のメンバーも私たちの活動に賛同をしてくれ、快く調整役をしていただいている。

…という盛りだくさんの内容で支援活動を行っています。11/12に新たに地震が発生し、KOBEの経験からトルコの復興にも時間がかかると思われます。そのため、私たち委員会は今後も継続してトルコの救援に携わっていきます。

*トルコ救援に関する詳しい情報を求めの方は、被災地NGO協働センターまでご連絡下さい

救援活動の中心的な役割を果たしていた草地氏が1月2日、敗血症のため急逝されました。

NGO KOBE・イスタンブルのメンバーは、「草地さんの写真の傍らで作業をしたいので写真がほしい」と事務局に連絡をくれました。

草地さんのご冥福を心よりお祈りいたします。

神戸の心、受け継がれ

【ドウズジェ16日】岡

トルコ被災地に「KOB

本峰子】被災者たちのテントに、「KOB」ていろ手書きの文字があつた。新たな大地震で四百五十人以上の死者を出したトルコで、八月の大地震の被災者グループが、新たな被災者の支援を始めた。阪神大震災の被災地・神戸の市民団体から援助を受けているグループで、「現場の二千人は被災者同士が一番よくわかる」といちはやく立ち上がった。零下まで冷え込む被災地の公園デント村に、神戸岩の支援の輪が広がっている。

現地NGO 新たな被災者援助

震源地ドウズジェの街の中心にある公園に、被災者たちが住むテント数百張りが並ぶ。「KOB」て書かれた五十五張りのテントがあった。八月の大震災の震源地に近いデリンジエ市の市民グループ「民間震災対策委員会DEKMAK」が地震の十二時間後になって

て、その入り口に油性フェルトペンで書いた。デリンジエ市では、八月の大震災で千二百人が犠牲となり、地区によつては七十九人分かっている」とメンバーがDEKMAKだ。

「被災者である私たちが食料などを配つていて。零下五度まで冷え込む寒さとなり、地区によつては七十九人分かっている」とメンバーがDEKMAKだ。

現場で何が必要か、いちばん分かっている」とメンバーがDEKMAKだ。

「KOB」から支援をもらひに、飲料水や毛布、古着、

下五度まで冷え込む寒さをしのぐため温かい食事を用意できる炊き出しの調理

が、救援の手が届き始めた

のは三百後。「政府の対応を待つていてはだめだ」と、市民がお互いの生活を

して置いて助かった。金塊のアパートからは何も持ち出せなかった。「政府の配給はあっても不公平。私たちには何も届かない。民間の救援がなければどうなつていいことか」と話す。

DEKMAKには、神戸の民間グループが支援して

いる。「被災地NGO協働・エレン代表は話す。寒さが架け橋だが、この人のつ

ながらを大切にしたい」と

DEKMAKのバリッシュ

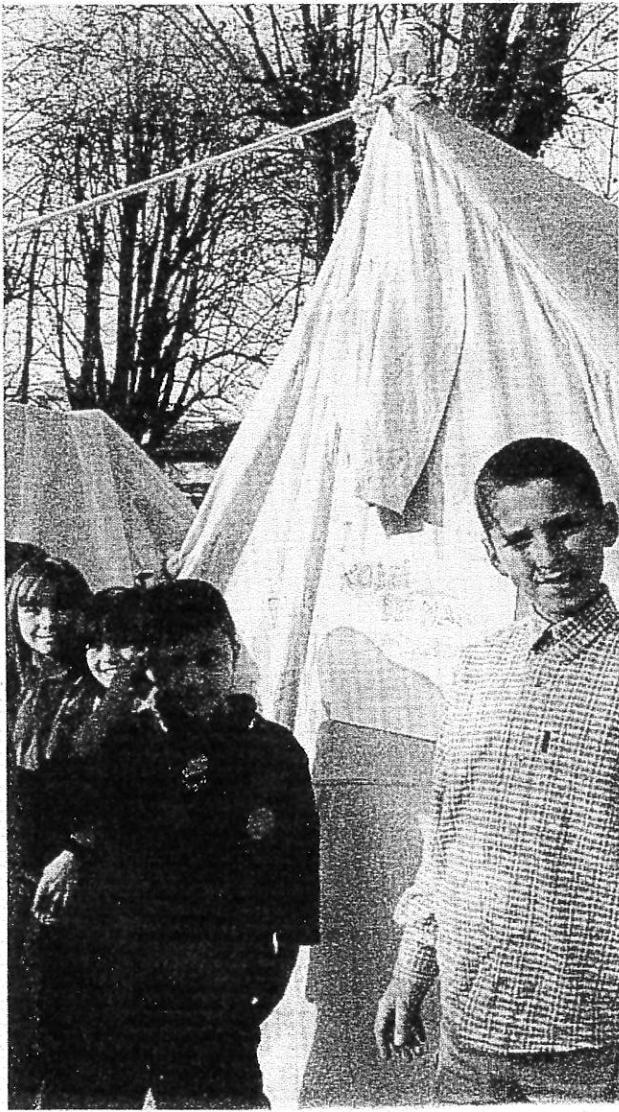
・エレン代表は話す。寒さ

にこえる人々のための冬

のテントの用意や、「公

園デント村」の自治組織の

支援も始めている。



「KOB」の文字があるテント前。テント村で暮らす子どもたちが集まってきた、笑顔を見せた
トルコ北西部、ドウズジェで

…被災地支援情報…

台湾 大地震

<第1次先見隊派遣>

- ・10/1～5の5日間、4名の先遣隊を派遣して情報収集を行う
- ・台中県、南投県の被災地を視察
- ・現地の市民団体と情報交換

<第2次救援隊派遣>

- ・11/～6、草地委員長はじめ2名を現地に派遣
- ・支援プログラムを決定
 - 1.福亀小学校再建について
 - 2.横断的連絡調整組織の設立、運営のための支援
 - 3.台湾希望工程協会へのサポート（リーダー：邱明民氏）

* 邱明民氏は、当委員会のカウンターパート的な役割をして頂いています。

以上のように、2回の派遣団を現地に送り、その中から現地での支援内容を確認しました。今現在、邱明民氏と連絡を取りながら、その後の進捗状況を確認しています。

1999年9月21日

9/21に発生したM7.6の地震により、2,100人を超える犠牲者を出したました。私たちは翌日からトルコ同様「台湾地震・緊急救援委員会（委員長：草地賢一）」を立ち上げ、台湾支援を開始しました。

(右)台湾地震被災地の様子
(下)現地の人々との意見交換
(台湾地震・緊急救援委員会
第2次救援隊撮影)



緊急救援

ベネズエラ水害

南米今世紀最大の被害か 死者・行方不明者30,000人超える恐れ

12月10日ごろから降り出した、暴風雨の影響で、ベネズエラ北部のバルガス州を中心に、大きな土砂災害が発生しました。そのため、20日に委員会を立ち上げ、救援活動を開始する事になりました。今後、現地にスタッフを派遣して、現地の情報を把握する用意もあります。

また、皆さまのご協力を「トルコ」「台湾」と合わせてお願いいたします。

・募金の振込先：

郵便振替 口座番号 00970-7-39728

加入者名 阪神大震災地元NGO救援連絡会議

* 通信欄に「トルコ支援」「台湾支援」「ベネズエラ支援」のいづれかをお書き下さい

ベネズエラ水害・緊急救援委員会

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町7-2-6 被災地NGO協働センター内
TEL078-685-0068 FAX078-685-0071



ベネズエラ水害被災地

....被災地支援情報....

新年カンパをお願いします!!

1995年5月に「阪神大震災地元NGO救援連絡会議仮設住宅支援連絡会」として始まった私たちの活動も、現在5年目を迎えています。

避難所や仮設住宅への支援といった当初のボランティアの役割も、5年の歳月を経る中で、様々な分野にまたがり、広がり、変化しつつあります。

「被災地NGO協働センター」となった現在は、「まけないぞう」を通じた被災者の生きがいづくりや、KOBEの経験を活かした災害救援が活動の中心となり、それらを通して学んだことを社会へ活かしていくための提言活動を模索しています。

震災5周年を迎えるこれからが正念場です。

もっとも、震災以来いつも正念場ばかりのような気がしないでもないですが、これまでのKOBEでの出来事を検

証し、新しい市民社会へ活かしていくための新しい正念場だと考えています。

まだまだ今後も皆さんの支援を必要としています。

「じゅりみち」の発行をお休みしていたこの間、NGO協働センターのスタッフは、前ページまでにご報告したトルコ・台湾地震の救援活動の事務局を担ってきました。8月以来の5ヶ月間、人件費の補助の自処のないまま現地とKOBEの連絡調整を行ってきました。

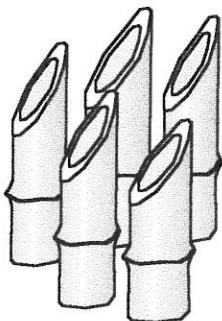
そんな事情もあって、正直などころ、台所事情がちょっと苦しくなっています。

カンパのご協力お願いいたします。

合わせて今後ともより一層のご指導、ご鞭撻をお願いいたします。

ボランティア大募集!!

震災5周年の節目の日をKOBEで過ごしてみませんか?



いよいよ震災5周年の節目の日が近づいています。

1月17日には昨年同様、「KOBEに灯りを」と題して三宮の東遊園地で鎮魂と再生のろうそく追悼を行い、18日には「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」を企画しています。

準備・運営のスタッフをたくさん募集しています。当日だけの参加OK。是非是非参加して下さい。

参加できるというは、被災地NGO協働センターまで。

ご連絡をお待ちしております!!

1.17

KOBEに“灯り”を



■とき 2000年1月16日(日)
1月17日(月)

■ところ 三宮・東遊園地
(三宮駅から南へ徒歩5分)

竹筒の中に浮かべたろうそくの灯りで、「1.17KOBE」の文字を浮かび上がらせる鎮魂と追悼の集会です。

■とどけ!!希望の“灯り”2000
(16日14:00~17:00)

模擬店とステージイベント

■つどい1.17(17日5:46~6:00)

■市民の集い(17日13:00~)

午前5時46分と夕方日没時にろうそくに点灯します。多くの方々の参加をお待ちしています。

震災5周年
市民とNGOの『防災』
国際フォーラム

くらし再建
5年の体験
21世紀世界へ

■とき 2000年1月18日(火)

■ところ 神戸市勤労会館

3階・4階会議室(三宮駅前)

■開会挨拶 高村 勲 フォーラム組織委員長(13:30~13:45)

■メインフォーラム(13:45~17:45)

「KOBEの経験とトルコ・台湾」

発言者 トルコ・台湾支援に携わった国・県・市・NGO

コメントーター 芹田 賢太郎

■子どもフォーラム(13:45~16:00)

「災害・子どもたち・心のケア」

パネリスト 井出浩/藤井昌子/大江浩

■文化フォーラム「神戸文化のこれから」(13:45~16:00)

総合進行 岡野 亜紀子 パネリスト 平田 康/池田 寛彦/島田 誠

■ジェンダーフォーラム(13:45~16:00)

「女たちの震災体験～あの日から5年 そしてこれから～」

パネリスト 河井美砂/川畠真理子/中川俱子

■市民検証フォーラム

部会 (13:45~15:45)

・コミュニティ・まちづくり部会、働く場部会、社会部会

全体会 (16:00~17:45)

■語り部コーナー「グループ117」(14:00~16:00)

■草地賀一の部屋(12:30~17:00)

■結びのフォーラム(18:00~20:40)

コーディネーター 芹田 賢太郎 発言者 各フォーラムより

パネリスト 今田 忠/黒田 裕子/増田 大成/瀬戸口 仁三郎

■“2000神戸宣言”発表(20:40)

どう 通信。

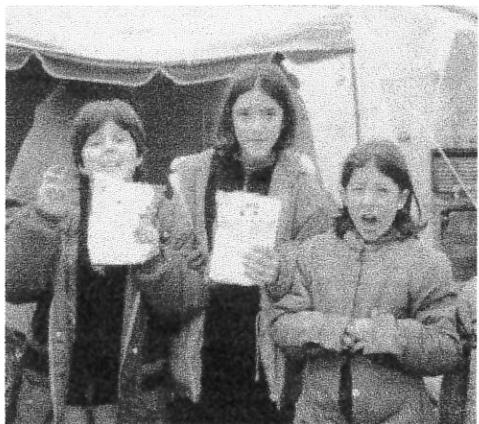
発行所：神戸市中央区東川崎町7-2-6 〒650-0044
被災地NGO協働センター

第15号 2000.1.13



♥おかげさまで

第十五号



ト
ま
け
コ
な
い
子
ぞ
う
を
手
に
す
る
ユ
ズ
ジ
エ

「まけないぞう」が生まれてからもうすでに約2年半が過ぎています。この間、本当に多くの方々に支えられ・助けられてきました。改めてみなさんにこの紙面をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

昨年は災害が立て続けに発生し、センターとしてもんやわんやの一年でしたが、「まけないぞう」を通して、トルコ・台湾に支援することができました。これは、とてもうれしいことです。いつも全国のみなさまに支えられるだけでなく、被災地としても何か誰かの役に立ちたいし、恩返しがしたいと思っていたことが少しづつ形となって動き始めています。今回のトルコ・台湾支援では限定3000個の「まけないぞう」400円のうち、トルコ・台湾・KOBEに100円づつを送り、残りの100円を送料や材料費に充当します。

神戸では「自立」とは「支え合い」ということが提案されていますが、「まけないぞう」を通してまさに「支え合い」の輪が広がっています。このように「まけないぞう」が支え合い・助け合いのきっかけになってくれたら幸いです。本年もみなさんと一緒に「まけないぞう」を育てていきたいと思います。今年も「まけないぞう」を通して、新しい出会いや気づきがあることを願っています。今年もどうぞよろしくお願ひ致します。

あつたがタオルと ともに届いたお手紙



12月12日付の朝日新聞で拝見しましたが、お手拭きタオルで被災地を応援していることを知りました。神戸の震災の件は、たまたま息子が赴任地で皆さんに大変お世話になりました。老ボレの私は何かボランティアをしようにも、アイディアが浮かびません。家にある物でお役に立てて頂けたら幸いと存知ます。（千葉県柏市）

先日、朝日新聞で「まけないぞう」の活動を知りました。

震災で神戸の自宅が半壊し、東京に身を寄せていました私の祖母は、神戸に帰りたいと言ひ続けながら、先月亡くなりました。

同封のタオルが国内外の被災者のお役に立てれば幸いです。（神奈川県横浜市）

年の瀬もおしげしまってまいりました。事務局の皆さんもお忙しいことと存じます。先日朝日新聞の記事を拝見し、少しですが我が家に眠っているタオルがお役に立てばと思い、送らせて頂くことにしました。小さいサイズのものも二つ入っていますが、どうぞご笑納下さい。あの地震があったとき、ちょうど公立病院で事務として働いており、交替で現地に派遣される医師や看護婦さんの出発を見送ったことが思い出されます。皆様方の活動がたくさん人の支えになっていると思っております。これからも、がんばって下さい。（三重県津市）

窓ガラス越の日射しは暑いですが、一步外に出ますと寒いこと冷たいこと。ついで出不精になってしまいます。協働センターの皆様にはお元気でお正月を迎えるそうですか？

先程ささやかにタオルを送った者です。

箱のすき間を埋める程度のおやつに、心豊かな皆さんきっと「感激しながら食べて下さっている」事を想像しながら、嬉しいやら、少し「バツの悪い」気がしてあります。

朝日新聞社のおかげで皆さんの「頑張り」を知ることができたし、私自身も、東京と離れていても少しだけこのような応援をさせていただくことで自己満足しております。

皆さんと仲間になったような気になつたりして…。

どうぞあまり無理をなさらずに、ご自愛しながら、楽しい輪が広がっていくように願っております。私の心ばかりですが、皆さんの交流に役立てて下さい。

本格的な寒さがまだまだ続きますが、お体をお大切に、いっしょに元気で2000年を迎えましょう。

協働センターの皆様（東京都品川区）

新品のタオル 集めています

今、まけないぞうのタオルを大募集中です
ので、こちらの方もご協力下さい。

「まけないぞう」

ぞう通信 第15号 2000.1.13 【第2面】

トルコ・台湾支援特別キャンペーン

上記のように限定3000個の「まけないぞう」の収益をトルコ・台湾支援に充てます。現在、みなさまのご協力により約1000個の「まけないぞう」がこのキャンペーンで販売されました。昨年の10月19日には大阪府バレーボール協会様のご協力により、「99ワールドカップバレーボール」に出場する全日本男女激励大会の会場で販売されました。会場では女子中高生らが次々に買い求め「お釣りは募金に」という声も聞かれたそうです。また、全日本佛教婦人連盟様には貴重な支援金を頂き、例年同様「一本のタオル運動」を事業方針として掲げ、会員のみなさまに広く通信を通して呼びかけて頂いています。昨年の記念大会での、島田喜久子様のお言葉の中で「続けることが大切である」という言葉が印象的でした。

昨年12月の朝日新聞掲載の記事では約100件、タオルの本数は約4000本も届けられました。本当にみなさまありがとうございます。

センターとしても国内外の災害救援を通して様々なことに気づかされて、学ばさせてきました。神戸の支援を通して自然に様々な活動・事業に関わっています。しんどいこともあります。やっぱり続けてきてよかったです。そして、もちろん支援者のみなさんがいてくれてよかったですと感謝しています。

パオ物語

関東を中心に神戸には行けないけど、神戸の応援がしたい、何か出来ることがあればというひとがパオづくりを進めています。パオもまけないぞうとともに少しづつ大きくなっています。千葉県の婦人会の方々は地元の老人会に呼びかけ、パオづくりをしてくれています。夏は港ということもあり忙しいけれど、オフシーズンはすることがなく、パオづくりが出来るようになります。作り手は「顔が難しいわ」「笑ったのは久しぶりだわ」「まけないチューみたいだわ」などと話をしながら、楽しい輪が生まれつつあるようです。

また、「こうふ・パオの会」では昨年10月に開かれた「ハートフェスタ」というバザーではなんと300個のぞうさんが飛び立って行きました。そして、前号で紹介した「タオルいっぽん」という応援歌に会長の市川さんが曲をつけて下さいました。とってもすてきな歌です。作り手さんの中には「なかなかうまく作れず途中でイヤになつたけど、少しづつ上手につくれるようになってよかったです」と言ってくれた人もいました。くじけそうになつても続けていてよかったですと感じてもらえてこちらもうれしかったです。

いろんな人がいろんなかたちで、それぞれの出来る範囲で関わってくれています。この人の輪・愛の輪がどんどん広がり「支え合い」の輪になっていくことを願っています。

(報告パオの会・Tokyo 代表 古市由紀子)

「まけないぞう」ありがとうございますキャラバン第4弾がこの度、中国地方を回ります。スタートは2月から3月中旬までを予定しています。スケジュールについては現在までに右記の日程のみ確定しています。

この他にもぜひ、キャラバン隊(1~2名)を呼びたいという方がいらっしゃいましたら、センターまでご連絡下さい。内容は被災地の現状報告やまけないぞうの販売・一本のタオル運動といったものです。また、どんな出会いがあるのか楽しみにしています。

震災復興タオル まけないぞう

W杯バレー激励会場で販売

阪神から台湾・トルコ支援へ

99.10.20 読売



台湾・トルコの地震被災者の支援のために販売された
「まけないぞう」(写真) 大阪府立体育会館(撮影)

阪神大震災をきっかけに生まれた「まけないぞう」がトルコや台湾の地震被災者のために十九日、「99ワールドカップバレー」(神戸市中央区)で開催された。会場では、W杯バレー激励会場で販売された。今後は東京で開催。トシコと名瀬由由佳が主催の大坂府大会(大阪府立体育会館)で販売された。今後は東京でのバザーなどにも出店。売上げ金は支援活動に充てられる。一本のタオルが結ぶ強い被災地同心の意図だ。

初めてボランティアとして「みんなで協力で助けながら上げるへ元気な住民」セントラルに参加。お年寄りばかりで活動として作られています。

■ 1999年10月20日 読売新聞

「まけないぞう」
ありがとう
キャラバン
中国地方で
始動!

- 2月10日(木) 山口県社会福祉協議会(山口市)
2月13日(日) 出雲サンホーム(島根県出雲市)
2月17日(木) 関ヶ原町(山口県下松市)
3月1日(水) 胎蔵寺(広島県福山市)
3月2日(木) 甲山町社会福祉協議会(広島県世羅郡)